

7月6日 年間第14主日

エゼ 2:2~5 IIコリ 12:7~10 マコ 6:1~6

1. マコ

v.5-6 「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。」

神の子イエス・キリストが殆ど奇跡(神の業)を行うことがお出来にならなかったという、この一見不思議な伝承が、使徒後の時代の教会で実感をもって受け入れられたのであろうと、私たちは推測します。そのような背景の上にマルコ福音書は成立したと考えられるからです。

復活のキリストは天から、地上の教会の人々の不信仰をきっと驚きの目で見ておられることでしょう。自分たちの間から多くの大衆運動家や反体制活動家を生み出していたガリラヤの地で、イエスの故郷の町の人々は、まさか自分たちの町の人間の一人が本物の預言者であるなどとは全く信じられなかったという皮肉な伝承が、使徒後の時代の教会にとって強いインパクトを持っていたに違いないと思われるのです。ナザレの村人たちだけが愚かだったのではない。今の時代の我々の教会もしばしばイエスにつまずいているのではないだろうか？ マルコ福音書が成立した当時の教会の自らを顧みる痛恨と反省が、現代の私たちに伝わって来るようではありませんか。

20世紀末、全世界のキリスト教は世俗化の頂点に達して、人々は既成の教会とその聖職制度に失望して、キリスト教離れ、教会離れが急速に進みました。今や会衆も聖職者も共に高齢化して、後継者難によるキリスト教会存続の危機が訪れています。

今なお多くの信者たちは、神は教会と共におられると信じ続けています。しかし会衆は自分の信仰に確信が持てず、聞かされているものが人間の言葉であって神のことばではないことを薄々感じて、不安の中を歩んでいます。キリストは天にあってこのような現代の教会の人々の不信仰に驚いておられると、今朝のテキストは語っているのです。

2. エゼ

v.5 「彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであらう。」

神の変わることはない生きた言葉(IIペト 1:23)であるキリストの福音を語る預言者は、どこにいるのでしょうか。人間の言葉を語るだけの騒々しい指導者や活動家と、神のことばを語るために遣わされた預言者を見分けるのは、会衆一人一人の目と耳なのです。これを見分ける責任を神は会衆一人一人に求めておられます。私たちは(終末の)キリストの日に、騒々しい人間の言葉にかき消されてキリストの福音を聞けなかったと言い訳することは、決して許されないのです。

イスラエルが反逆の家であったという先祖以来の歴史的事実がどんなに重くのしかかっているとしても、しか

も神の救済史においては、確かに彼らの間に預言者が遣わされていたということの方が決定的な鍵となる事柄なのです。

現代の教会が外見上崩壊間近な様相を呈しているとしても・・・イスラエルの歴史はそのような危機の繰り返しでありました・・・、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25) キリストの福音を語る預言者は、確かに遣わされているのだという希望を持ちましょう。終末の裁きの日になって初めて気付くのではなく、今や再び私たちは信仰に目覚めることによって、確かに語られている生きた言葉であるキリストの福音を聞き分けることを願い求めて進もうではありませんか。

3. II コリ

v.9 「すると主は、“わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ”と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

使徒パウロが自らの弱さの中で、否その弱さの中でこそ、「わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりもずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」(I コリ 15:10) と語ることが出来たその感謝に、私たち現代のキリスト者は共感を覚えるべきです。それは独り使徒パウロの問題ではなくて、危機的な状況にある現代の教会にそのまま当てはまることだからです。

すべて洗礼の秘跡によって救われたキリスト者は神の国の相続人であって、「選ばれた者たち」(ロマ 8:33) と呼ばれ、「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」(ロマ 8:34) 現代の教会は「むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」(v.9) これこそがキリストの福音なのです。

アーメン、ハレルヤ。

7月13日 年間第15主日

アモ 7:12~15 エフェ 1:3~14 マコ 6:7~13

1. アモ

預言者アモスは、イスラエルの預言の歴史に画期的な新しい時代を開いた人であります。彼が出現したのは、北王国最後の隆盛期となったヤロブアム II(BC.786-746)の治下でありました。アモスは南王国の人でありましたが、北王国随一の聖所ベテルで預言活動を行い、さらに北王国の首都サマリアにまでも足を伸ばしたものとされます。彼は、旧約聖書にその預言が記録されているいわゆる記述預言者の最初の人であり、また当時のオリエントの諸宗教に一般的な職業預言者とは何の関係もなく、イスラエルの神ヤーウエの直接の派遣によって預言活動をした人でありました。

vv.14-15 「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、“行って、わが民イスラエルに預言せよ”と言われた。」

2. マコ

初代教会が福音の宣教というものを、イエス・キリストによる派遣と固く結びつけて理解していたことを、私たちは新約聖書から読み取ることが出来ます。マルコ福音書が成立した当時の教会が、教会による福音の宣教の継続を、主イエスによる使徒たちの派遣に根拠付けて理解していたことを、私たちは今朝の福音書のテキストから知るのであります。

教会の宣教は使徒たちの宣教の継続であり、従ってこのテキストにおけるイエスによる12人の派遣は、復活のイエスによる現在の教会に命じられた派遣として受け止められていました。それは緊急の派遣であり(vv.8-9)、いささかも職業的な宗教人による冠婚葬祭や祭りの延長線上で考えられるような性格のものではありませんでした。宣教を拒否する人々への「足の裏の埃を落とす」行為や「油を塗って病人をいやす」行為は、初代教会における実際の活動の姿を映し出しているものと思われまます(使 13:5、ヤコ 5:14)。

現代の私たちはこのテキストから、宣教の内容が何であったのかを直ちに読み取ることが出来ませんが、キリストの福音の宣教が力強く生き生きと語られていた初代教会では、それは改めてここで解説してみせる必要のないことであつたに違いないのです。それは「時は満ち、神の国は近づいた」(マコ 1:15) ことと固く結びつけて理解されてきました。

現代の私たちは、使徒たちの宣教に深く耳を傾けて聞くことによって、現代の教会が久しく見失って来た“その宣教のために教会が復活のキリストによって立てられ、遣わされているもの”(福音)の内容を再発見しなければなりません。

3. エフェ

v.7 「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」

キリストの福音の基礎は、洗礼の秘跡によって私たちが受けた罪の赦しと贖いにあります。人は救われたいと願うなら、イエス・キリストの血による贖いと罪の赦しをいただくために、洗礼を受けなければなりません(使2:38)。

キリストの福音は内容豊かなものであって、代々の教会はこれを理解する知恵を神から与えられて、「信者に神のこぼしの食卓を豊かに与えるために」(典礼憲章51)力を注いで来ました。そのために主日のミサを始めとする各種の教会の祭儀や儀式が果たして来た役割を、私たちは重く受け止めなければなりません。

このキリストの福音の非常に重要な構成要素が「秘められた計画」(v.9)とここで呼ばれているものであることに、注意を喚起したいと思います。

今日に至る過去何世紀もの教会の歴史において、すでに久しくこの「秘められた計画」は大衆の通俗信仰からは排除されてしまって、一般の信者たちに正しく理解され受け入れられては来ませんでした。聖書が伝えている使徒たちの宣教、そして(大いに感謝すべきことに)使徒たちの伝えた福音を非常に健全な形で受け継いで来ているカトリック教会のミサ典礼書や各種儀式書の存在とは裏腹に、一般の信者の宗教心からこの「秘められた計画」が欠落し、怪しげな通俗信仰に置き換えられて来たのでした。21世紀の私たちの教会が、職業的な宗教人による冠婚葬祭や祭りに過ぎないものから脱却することが出来るか否かは、使徒たちの宣教の継続としてのキリストの福音に信者たちが目覚めて、この「秘められた計画」を再び聞くことにかかっているのです。それは「異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束に与かる者となるということです。」(3:6)

私たちすべてのキリスト者は、御国を受け継ぐための保証として、聖霊で証印を押されたのです(v.13-14)。カトリック教会はこれを記念するために、洗礼の秘跡に加えてもう一つ堅信の秘跡を大切に出来て来ました。使徒たちの宣教の継続としての現代の教会の宣教が、再び「時は満ち、神の国は近づいた」(マコ1:15)ことと固く結びつけて語られ、聞かれるようになることは、21世紀の教会の希望であり光です。

アーメン、ハレルヤ。

7月20日 年間第16主日

エシ 23:1~6 エフェ 2:13~18 マコ 6:30~34

1. マコ

マルコ福音書の中で使徒という呼称が使われているのは v.30 と 3:14 の2ヶ所だけで、私たちは初代教会の人々の観点からのイエス伝承の再解釈の痕跡を、そこに窺い知ることができます。

初代教会には使徒たちと共にその協力者である預言者や教師があり、その外にも多くの奉仕者たちがいました。もちろんその中で第一の位置に使徒たちがいて、使徒パウロが語った次の言葉は他の使徒たちも全く同様に主張することの出来るものであったと思われます。

「わたしがあなたがたをもうけた(生んだ)のです。そこで、あなたがたに勧めます。わたしに倣う者になりなさい。」(Iコリ4:15-16)

しかし使徒たちは、他の宗教の場合に見られるように、キリスト教の教祖となったのではありませんでした。キリスト者が受けた救いは教祖が生み出し造り出した教えによって与えられたのではなく、「福音を通し、キリスト・イエスにおいて」(Iコリ4:15)、「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦され」(エフェ1:7)で与えられたものであります。

イエス・キリストこそが、否イエス・キリストだけが教会の唯一の牧者であるということを、初代教会の人々が強く実感していた様子が、このマルコ福音書のテキストから現代の私たちに伝わって来ます。

v.34 「イエスは船から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」

誤解してならないことは、これは当時の教会で人々が使徒や教師に失望していたとか、その指導力に不足や疑問を感じていたということでは全くないということです。キリストは死者の中から復活されました。その復活のキリストが現在の教会を牧し、信者に聖書を説明して下さり(ルカ24:32)、福音を教えてください、初代教会は理解していたということです。

2. エシ

v.5 「見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。」

神が新約の時代にお立てになる新しいイスラエルの牧者のことを、エシミヤは預言しました。

使徒パウロはその宣べ伝えている福音が、「神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです」と述べた後に、続いて次のように説明しました。「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。」(ロマ1:2-4)

教会における聖職位階にある人々の存在は、教会が根本的に復活のキリスト・イエスに依り頼む存在で

あるということを、共同体に示し続ける責任を担うためであり、従って彼らはキリストの体である共同体から離れては存在し得ない……と、1983年にWCC(世界教会協議会)で採択された「リマ文書」は述べています(邦訳 pp.74-77)。これは東西両教会およびプロテスタントの殆どの主要教派を含む諸教会が一つの合意に達した文書として、世界教会史にとっても画期的な出来事であったとされているものです。

教会における聖職位階にある人々の存在が重んじられるのは、イエス・キリストこそが、否イエス・キリストだけが教会の唯一の牧者であるということを共同体に示すためであって、その務めが有効に機能しない場合には、キリスト者たちは「飼い主のいない羊のような有様」に陥ってしまいます。

3. エフェ

神の約束は元来は旧約のイスラエルの民のものでありました(ロマ9:4-5 参照)。この約束されたものを異邦人である私たちが「一緒に受け継ぐ」(3:6)というのが、使徒たちが宣べ伝えた福音であります。その福音の恵みは、「キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって」(v.13) 私たち異邦人に及ぶこととなりました。

「敵意という隔ての壁を取り壊し」(v.14)という言葉が単独で、使徒の伝えた宣教から切り離されて独り歩きし、平和運動の一つの根拠付けとして用いられて来ていることを、私たちは知っています。しかし使徒たちの宣教の中では、これは「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦され」(1:7) たことによって、「異邦人が…… 約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ…… 者となる」(3:6) という、福音の神秘を語っているものなのです。

現代キリスト教会のあらゆる混乱と世俗化の嵐にもかかわらず、それでもなおイエス・キリストこそが、否イエス・キリストだけが教会の唯一の牧者であるということを私たちが思い起こすようにと語りかける神のことばを、今朝の朗読聖書から聞き取る人は幸いです。

アーメン、ハレルヤ。

7月27日 年間第17主日

王下 4:42~44 エフェ 4:1~6 ヨハ 6:1~15

1. ヨハ

主イエスが五千人の人々に食べ物を与えられた物語りは、共観福音書にもヨハネ福音書にも伝えられています。近代のキリスト者たちが、この物語りに様々な合理的説明を試みて来ましたが、それは……他の多くの聖書の箇所に対する解釈の場合と同じように……、聖書が本来語ろうとしている使信を忠実に聞くためではなくて、単に合理主義的な近代人にとって聖書の物語りを文字通りに受け入れることが不可能に見えたからであります。

しかし、私たちが一つだけ注目しなければならない確かなことがあります。それは、福音書の編集者たちはこれを作り話としてではなくて、実際の出来事の伝承として、しかも驚くべき奇跡の伝承として語り伝えようとしたということです。しかもヨハネ福音書は、それを神の救済史の中の出来事として信じ、従って新しいイスラエルである教会のミサへと受け継がれている神の御業を説明するものとして、伝えています。

v.9 「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」

少年が登場するのはヨハネ福音書だけです。このことから私たちは、ヨハネ福音書がこの伝承を 王下 4:42-44 を背景に置いて理解したと推測するのです。

2. 王下

紀元前9世紀の北イスラエルの預言者エリシャの物語りの中に、この奇跡の伝承があります。それはほんの小さな挿話の一つのように、それだけでは特に大きな意味を持たないかのように伝えられている物語りです。

その地は飢饉に見舞われ、エリシャと共にいる仲間の預言者たちも食物に飢えていました。そこへ一人の男が捧げ物のパンを袋に入れて持って来たとき、この奇跡は起こったのでした。百人以上の仲間たちが食べるにはとても足りない筈の僅かなパンを、エリシャは召し使い(少年)に配るように命じました。

v.44 「召し使いがそれを配ったところ、主の言葉のとおり彼らは食べきれずに残した。」

主イエスが五千人に大麦のパン五つと二匹の魚を分け与えられたときの奇跡と、このエリシャのときの奇跡とは、同じイスラエルの神ヤーウエの御業であったということを、ヨハネ福音書は私たちに語っているのです。

3. ヨハ

教会は洗礼の秘跡によって罪の赦しを受けて、共にミサをささげている人々の共同体であります。この

ミサは主の最後の食卓での聖体の犠牲の制定に起源する、キリストの死と復活の記念祭儀であり、ヨハネ福音書はこのガリラヤでの奇跡物語りを、ミサの理解のための神学的素材として用いたのです。「過越祭が近づいていた」(v.4)という言葉は、物語りの時間的流れを説明するためであるよりは、むしろ6章全体の理解の前提として述べられているのです。

単なる不思議な奇跡の記録としてではなく、私たちがミサでお会いする祭壇のキリストが、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者(メシア)である」(v.14)という信仰を、私たちの中に確かにするために、ヨハネ福音書は語っています。

4. エフェ

キリストの「体」(v.4)である教会は一つです。この教会は終末の時の中に置かれていて、「キリストの日までに」(フィリ1:6)一つの教会として造り上げられて行くという目標を目指しています。「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ」(v.5)でありますから、歴史の教会も実際にそのことを真理として受け入れ、それを具体化して行く努力をしなければなりません。

事実、歴史の教会はすでに初期の頃から今日に至るまで、分裂と対立を繰り返して、「幾つにも分けられて」(Iコリ1:13)歩んで来ました。

「それにもかかわらず、信仰によって洗礼において義とされた者は、キリストに合体され、それゆえに正當にキリスト信者の名を受けているのであり、カトリック教会の子らから主における兄弟として当然認められるのである。」(エキュメニズムに関する教令3)

それぞれ出身教会を異にする兄弟が、たとえそのような機会が比較的少ないとしても、いろいろな機会に共にミサをささげることが出来る時、私たち信者はそのことの意味の重大さを主にあって覚えたいものです。私たちのミサの中で、祭壇のキリストは、人間の浅はかな分派的対立を超えて、すべてのキリスト者に恵みをもって臨んでくださるのでありますから。 アーメン、ハレルヤ。